
東京カタストロホテル九々九式

シラカベヒロ氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京カタストロホテル九々九式

【Nコード】

N9052U

【作者名】

シラカベヒロ氏

【あらすじ】

東京のカタストロなホテルで九々と九九が。

（前書き）

第六回講談社BOX - A i R新人賞最終候補作です。

零話〜二話までを掲載しております。

数ヶ月後には削除する予定です。何卒ご了承ください。

零話 江戸川乱歩氏が思い描かない山手線のあるコンポジション

「大人つてさ、二種類いるのね。」

自分の好きなことだけやり続ける楽しくて迷惑な大人と、

自分の好きでもないことしかやり続けない悲しくて迷惑な大人。

…… あーあ。大人になんかなりたくないねー」

僕の幼馴染、九流子流九くちゅうりゅうくが小学三年のとき言った言葉だ。すごいませてると思う。その一つ下、小学二年だった当時の僕には、彼女の言ってる意味がよくわからなかった。でも今は、わかる、気がする。

今。

東京は非常にカラストロフな状態にあるという噂がまことしやかに囁かれているわけだけど（主にネットとかムーとかで）、さてその噂は噂に過ぎないのかまことしやかはしやかに過ぎないのか実際問題どうなのかっていうとそれはもう歴然とひゃー東京は今とつてもカラストロフな状態にあるなあと僕は思ってた、なんでそう思うのかっていうとごく単純、殺し屋が蔓延り殺人鬼が横行し毎日毎日がバタバタ殺されつまりもはや殺人事件は東京の日常ルーチンにすっかり組み込まれているという現状、でも事件は殺人関連だけじゃなくて、たとえば連続少女誘拐事件、たとえば謎の怪盗・骨クジラ（なんか妖怪の名前みたいだなーと思ってググってみたらほんとに妖怪の名前だったからびっくり）による連続美術品盗難事件、終いには悪魔を呼び出して東京を壊滅させようと企むインチキくさい団体まであるとかないたか、とにかく、江戸川乱歩はあれ小説家じゃなくて予言者だったんじゃないのって思っちゃうぐらい東京は今、猟奇的なおいが漂う深く濃い闇にじんわりと包まれていた。

けど、包まれていようがなんだろうが、人々は毎朝山手線にぎゅ

う詰めで乗って会社に行って仕事して、学生は学生らしくくだららして、そんな至って日常的日常をつらつらーっとみんな過ごしちゃって、こういうところが乱歩の描いたトウキョウと現代のこのTOKYO CITYの大きな大きな差だ、と、僕は思う。実際僕も普通の大学生（美大生なんだけど果たして美大は普通の大学というカテゴリーに入るか否か、ってこれいつかデイベートしてみたい）として、大学一年目の終わり、初めての長い長い春休みをだらっただらだらっただら満喫している。今日は三月一日。あと一ヶ月以上もある僕の春休み。

それにしたって、こんな猟奇趣味ギラギラ溢れる帝都東京に暮らしてるんだから僕が探偵だったらこの長い長い春休みを凶悪事件の解決（いや全部は無理にしても連続少女誘拐事件ぐらいなら一ヶ月あればどうにかできるんじゃないかなーいや解決とまでいかなくても犯人の手がかりぐらいいは）にあてることも出来ただらうけど、でも残念ながら僕は探偵じゃない（そもそも今日び浮気調査以外の探偵とかいるの？）。

探偵は、濃い闇を拭い去る側の人間だ。
しかし 僕は探偵とは逆側の人間だ。
つまり、濃い闇を作り出す側の人間だ。

そう、僕は。

一話 ホテル、あるいはパーティーの会場となるであろう巨大なオブジェ

「殺し屋、やってらっしゃるんですね？……最後にもう一度、確認させて頂きたいんですが」ぼそぼそと男の小さな声。

「ええ、やってますとも。二十四時間三百六十五日人生八十年常時接続いつでもどこでもやってますとも」べらべらと男の大きな声。

二人の男の声が、ドアの向こうから聞こえてくる。僕は寝ぼけまなこで歯ブラシをしゃしゃかやりながらそのドアを開ける。目の前に広がる広くないリビング。小さなちゃぶ台を挟んでソファとパイプ椅子、という統一感ゼロの家具たち。ソファにどっかり座るがたいのいい黒スーツ男、リンカーンみたいな髭。パイプ椅子にちょこんと座るひよろつとした初老の男、リンカーンの秘書（想像）みたいな丸眼鏡。ちらちら二人を見ながら僕は歯をしゃしゃこ丹念に磨く。朝起きて五分以内に歯を磨くのが僕のポリシー。と、リンカーンが僕に気づいてこっちを見て、

「おおーなんだ九々人^{くぐ}やつと起きたか。ああほら、ご挨拶しなさい、この方が」

「あ、いえいえ……私はこれで失礼しますので」

僕を見るなりそくさと席を立つひよろ眼鏡。同時にリンカーンがソファから立ち上がり僕を指差しながら、

「まあまあ日ノ（ひの）さん、何を隠そうこいつがですな、我が事務所きつての腕利き、やり手、一押し、最先端、抱かれない男ナンバーワン、ああいや抱かれない男ナンバーワンはこいつじゃなく私でしょうな、いやこう見えても私ね昔は女殺し女殺しと言われてたもんで、いや今も言われてますが、そして女殺しなんて言って本当の意味でも殺しちゃってるダブルミーニングなわけですが、なーんて」とかなんとか、がははーと大口開けて笑う。僕は歯ブラシくわえたままあくびをふわつと一つ、目をこすりこすり洗面所へ行き、ぺっと口の中の泡を吐き出してコップに水入れそれを入れたガブガブぐじゅぐじゅペツペツペ。

すっきりした気持ちでリビングに戻るともう男二人の姿はなく、もにもによ話し声だけが玄関のほうから聞こえてきた。何を言ってるのか定かじゃないけど「ではよろしくお願いします」「はいはいえいえこちらこそ」「後ほど迎えをやりしますので」「それはそれは

どうもどうも」的な断片がちらちら。ビジネスストークが大人って大変だなくても僕も来月で二十歳〃大人かあ一般的には、とあくび混じりでふわふわ考えながらソファに腰掛けると目の前、テーブルの上に紙切れが置いてある。依頼申し込み書。

『依頼人「日ノ人成」^{ひのひとなり} 依頼大賞「日ノ海」^{ひのつみ}』

紙切れの一番上、依頼人と依頼対象の記入欄には神経質そうな小さい文字でそんな名前が書いてあって、ふうん同じ苗字ってことは血繋がってるのか、そんなことより『依頼大賞』っていうこのミスプリント教えてあげようかなあでも面白いからほっとこうかなあ、と、頭の中で架空の番組欽ちゃんの依頼大賞のオープニングテーマが流れ始める午前十時。

「あー、くーさん、やっと起きたんですか？ もー、寝すぎですよ」
ぼわっとした声が後ろから聞こえたので振り向くと、くすんだ紺色の制服に白いエプロン姿のあおめが立っていた。ちょっと怒ったような顔。

「ん、あれ、髪切った？ もしかして」

僕が言うとおおめはぱあっと顔を明るくして、くるっとその場で一回転。

「えへへ、気づきましたかあー？ 結構ばつさり切っちゃいました。どうですか？ 変ですかねー？」

背中まん中まであった髪が今は肩にかかるぐらいのふわふわしたセミロングになっててうーんなるほどばつさりだと思いつつ、変じゃないけどでも髪短くするとすごい幼く見えるなあ、ただでさえちよい垂れ気味の目とかうつすらピンク色のほったとかちっちゃな口とかちっちゃな鼻とか童顔要素満載なのに髪型変えて童顔二割り増しぐらいになっちゃってこれじゃ四月から高校の最上級生であるところの高校三年生になる十七歳の女の子には見えないなあ、というような旨を短縮した結果、

「変だねー」

と言うと、あおめはしゅんと音出そうなくらいしゅんとした顔を

する。僕はその表情の変化をまるで四季の変化を見るような感覚で、
味わい深いなあと思い見ながら、

「それで、あおめは何してたの」

「何って晩ごはんの準備ですよお」

言われてみれば確かにキッチン方面から、炊飯器が出す湯気のに
おいが漂ってる、気がする。

「今日の晩ごはんなに？」

「今日の晩ごはんはごはんですよー」
うーん。

またか。

リンカーンがあおめを家に連れて来てからこの一年間、ごはんを
ごはんにごはんしたことが何回あるか、もう正直数え切れない。な
んでそんなにごはん（白飯ってほうの意味）が好きなのか、いつだ
ったかあおめに訊いたことがあったけど、あおめ@幼少期の結構重
めなエピソードを聞かされてまあまあダメージを受けた苦い思い出
がある。とにかく今夜の晩ごはんはごはんか。あれ？ え？

「晩、ごはん、なの？」僕が尋ねると、

「晩、ごはんですよ？」あおめが言う。

「え？ 晩なの」

「はい、晩です」

「今十時でしょ？」時計を見ながら訊く。

「今十時ですよ？」僕を見ながらあおめ。

「十時って晩の十時なの」

「十時って晩の十時です」

「僕……寝すぎた？」おそろおそろ訊く。

「はい、寝すぎです」はきはきとあおめ。ああ。

春休みの弊害。昼夜逆転。というかもはや昼夜逆転のお手本みた
いな生活をしてしまってる自分、に対して不安や失望を通り越して
もはや誇らしさを感じた。それはそれとして、

「あのさ、あおめ、ずっと気になってたんだけど」

「なんですかー？」

「後ろ狙われてるよ」

「へ？」

間の抜けた声を出しながらふりつと振り向くあおめ。あおめの背後には包丁を今にも振りかぶらんばかりに構えたポニーテールの女の子がとびつきりの笑顔で立っている。『立っている』も何も、あおめが登場したときからごはんの話してる間もずっと立ってた。で、その女の子は誰かっていうと紛れもなく僕の幼馴染、九流子流^{くりゅうこ}九だ。子流九は狼とか狐とかそういう獣偏で表せる獣の類よろしくピンと尖ったいわゆるアーモンド型の目をぱちくりさせながら、包丁を懷にしまい、にへーと笑いながら首を傾げる。それに合わせてふるつとポニーテール（馬の首ぐらいあるでかいサイズだからテールというよりむしろヘッド）が揺れる。揺らしながら口を開く子流九。

「へへ、はろーあおちゃん、そして九々人」

「あーコルクさん、来てたんですか！　こんばんわあ」

「はいはいおいつすどう？　殺ってる？」

殺ろうとしてたのは自分だろと思いつながら何も言わない僕。

「あれー？　でもコルクさん、どこから入ってきたんですか？」

「ん？　普通に壁登って窓からよ？」

「わーすごいですね！　ここ七階なのにー！」

「あはは、なんのなんの。十階までは地面と一緒にだしあたしにとっちゃ」

わーわーと何が嬉しいのか子流九の手をとりはしゃぐあおめ。一緒にになってはしゃぐ（というか、はしゃいでやってるって感じの）子流九。僕はそんな二人をぼんやりを見ながら、

「子流九、服、汚れ付いてるよ」と教える。

「ん、どこどこ」

「おなかんとこ、白いの付いてる、ほこりみたいな」

「あー壁登ってきたからねー」

ぱんぱんと服のよごれを払う子流九。

「あと袖んとこ、赤いの付いてる、血みたいな」

「あー仕事帰りだからねー」

ごしごしと袖の血のりを手で擦る子流九。仕事帰りなんだやつぱり。改めて子流九の服装をまじまじと見てみる。黒のだぼだぼしたパーカー、中に黒のキャミソール、黒いテカテカした生地の手ツトパンツ、黒いソックスに黒い靴。この、子流九の肌の白さがどうしようもないぐらい際立つ黒単コーディネートこそ、子流九の仕事着で。

子流九の仕事は、殺人鬼だ。

仕事っていうか趣味なのかも知れない。趣味を仕事にしてしまったのかも知れない（なんだかそれって理想的な生き方かも知れない）。

「んはあー。なんだろ、なんか急に氣い抜けてどつと疲れ出てきた。うへえー」

両手を上げぐーっと伸びをしながら、首をメトロノームみたいに振り振りぽきぽき鳴らして氣だるげに僕を見る。その様子、仕草、見た目、諸々、殺人鬼らしさなんて微塵もない、って当たり前だけに。らしさを前面に出してる殺人鬼なんていたらあっさり捕まってるだろうけど。とかぐだぐだ考えていると子流九が僕の顔のど真ん中を指差し、

「九々人おービアある？　ビア。一緒飲もうぜビアー」

「あーそう言われても、僕飲まないから、飲まないってか飲めないっというか」

「お？　あそうか。あんたまだ十代か。あたしあんたの一個上か」

「そうだよ自覚ないけど」

「あたしも自覚ねーなあ」

「コルクさん、ビア、お父さんのが冷蔵庫に入ってますよー確か」

「おーマジで。そんじゃ一本拝借しちゃおーへっへ、ビアビアー」
嬉しそうにひよいひよい歩きながらキッチンへ消えていく子流九。

てかなんでみんなビールのことビアって呼んでるんだ。流行りかと、ほどなく子流九が缶ビア（流行りに乗っかってみた）片手に戻ってくる。上機嫌であおめの肩に手を回す。ぷしゅとブルトツプを開けて「はいあおちゃん乾びー」缶ビアをあおめのほっぺたにくつつけ「ひゃ！ 冷たい！」びくつとするあおめを横目ににやにやしなからぐびぐび飲む子流九。

九流子流九。

僕と十何年来の付き合いがある彼女は、どこでどう間違ったのか今、東京で知らない人はいない、立派な（いや立派ではないけど）殺人鬼になっている。通り名は「アート・キラー」。たとえばダリの『記憶の固執』（時計がとろけてるやつ）とか、マルセル・デュシャンの『泉』（便器のやつ）に見立てて人を殺すことからそう呼ばれてるんだけどそれにしてもださいネーミングだと思う。ちなみにこの見立て殺人傾向は彼女の興味がシュルレアリスムとかダダイズム辺りにあるからということに起因していて、もし彼女の興味がルネサンスとか印象派とかキュビズムだったらこういう死体が転がることになってただろうとか考えて心底ぞつとする（ピカソのゲルニカを模した殺人とか想像しただけで意味もなく怖いしなんかメッセージ性も強い）。

「子流九さ、キュビズムとかって好きだったけ？」

「全然無理。吐き気がする。こないだ授業で吐きかけた」

「近代美術論？」

「それ。ほんと無理。思い出ただけで気持ち悪い」

「ピカソ」

「おえ」

「パブロ・ピカソ」

「うえっぶ」

「パブロ・デイエーゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パ（中略）ルイス・イ・ピカソ」

「おいやめろ九々人殺すぞ」

僕と子流九は、今、同じ美大に通っている。僕一年生子流九二年生。ちなみに大学だけじゃなく幼稚園から小学校から高校まで全部一緒だった。中学だけ別。まあつまりほぼ一緒。ここまでくると幼馴染というよりほとんど自分みたいなもんだ。気持ち悪い。ピカソのフルネームを耳にして青ざめた顔の子流九をぼーっと見る。一体ほんとに彼女はどこで道を間違えたんだろう。なぜ殺人鬼に。あれこれ考える。ああ中学のときかも。先述だけど中学は別々だったの、そのせいもあって僕らはちょっと疎遠だった。から、その間の子流九の変化を僕は知らない。そうか中学の可能性はあるな。ん？というか考えてみれば僕が殺し屋始めたのが中学のときだった確か。うーん、やっぱり中学って、思春期って、誰しもさまざまな変化が起こる素敵で大事な二度と戻ってこない時間だよなあみたいな模範解答的まとめを頭の中でまとめ上げながらソファに寝っ転がって子流九とあおめのやりとりを眺める。

「あ、でさーあおちゃん、どう？ 入る気なっただ？ うちの組織」組織、ってなんだかずいぶん持つて回った言葉だけでも確かに子流九が率いているのは組織だし組織としか言いようがない。あおめはその言葉を受けて、

「えつとお……うーん……」

もによもによと言葉を濁す。当然の反応だ。誰が好き好んで『東京都殺人鬼協同組合』なんていう嘘みたいでバカみたいな名前の組織に入りたがるもんか。

「あおちゃん絶対百パー素質あるんだから入ったほうが得すると思うよー人生マジで。マジで！ マ、ジ、で！」

あおめの肩を掴み、揺すり、熱弁する子流九。当然の行動だ。誰がどう考えたってあおめには殺人鬼の素質がある。だって遺伝子は絶対だから。

「あの子流九、気になったんだけど」

「なによ九々人、気になったことって」

「勧誘しといてなんで殺そうとしてたのあおめのこと」

「えー？ それはあれよ、自分の中のシリアルキラー（殺人鬼のことを）子流九は専門用語っぽくそう呼ぶんだけどシリアルって言葉コインフレークのイメージしか湧かないからなんかちょっと可愛い感じする）の血がそうさせただけで、自分の本心としては殺したいなんて思っただけで、なんだろう、つまり自己矛盾、哲学よね哲学フィロソフィー」

妙にフィの音だけネイティブな発音をさせる子流九、の言葉を遮って、

「おー九々人！ 依頼行く準備さつさとしてくれー」

と、リンカーン もとい僕の父親・現戦火の、バカ野太デカいバリトンボイスが響き渡った。

* * *

「しかしコルクお前、ちょっと見ない内にまた美人になったなあおい」
「へへ、褒めてもヤラせたりしないっすよおじさん」

「おーおーそりや残念」

ソファに深々座ってげらげら笑うリンカーンもとい父、と、ちゃぶ台の上であぐらかいてけらけら笑う子流九（お行儀が悪い）、を、パイプ椅子（ソファに寝転がってたのにあれよあれよで追いやられた僕）に座ってぼけーと眺める。正直、僕と父より子流九と父のほうがよくばど親子っぽく見えるなーとか思いながら。

「で、何しに来たんだコルクお前」ポケットから取り出したタバコにライターでぽうつと火を点けながら、のんびり喋る父。コルクはアメリカの司会者（偏見）みたいに大きく身振り手振りしながら、「勧誘っすよ、あおちゃん。あたしってばほんとにシリアルキラの鑑」とかなんとか言つて「ねーあおちゃん、あれ読んだ？ あたしがこないだ渡した雑誌いー」キッチンの方に向かって大声を上げる。

「はあい、ちょっとだけ読みましたあー」返ってくるあおめの声。

「どうだったあー？」

「なんかー、えっとおー、小さい女の子の写真があー、可愛かったですうー」

「おーわかる？ わかった？ ねーだよー殺したいよねぶっ殺したいよねーあの子、へへへ」

「ねコルク」口を挟む僕。

「なんだよ」

「なんの本渡したのあおめに」

「児童ポルノ」

「じどポツえほ」勝手に咳き込む僕の体。

「へっ、嘘よ嘘嘘。うちの組合の公式雑誌」

「公式雑誌」

ああそう言えばなんか聞いたことあったなとゆっくり思い出そうとしていると、子流九が懷から薄い雑誌を取り出し僕に差し出す。

『月刊・殺人鬼の友』。

冗談みたいな名前って言えるほど冗談として完成しきれてない感が多分にあるセンスのない名前の安っぽい雑誌。表紙には何やら小さな女の子の写真（やたらばやけててピントずれてて明らかに盗撮写真だとわかる）がでかか。つやつやした長い髪、目が大きくてまつげが長くて言うところのフランス人形みたいで、というか目だけじゃなくて全体的に人形みたいだった、生気のなさが。いい意味でも悪い意味でも、作り物みたいな雰囲気。

「あ、というかこれ、前も見せてもらったよね僕」

「うん見せた。見せた読ませた感想求めた」

大学でなんかの講義中に隣に座ってた子流九にこそつと渡された記憶がある（感想文書く用の原稿用紙三枚も一緒に渡されたけど謹んで丸めて捨てた）。

子流九が雑誌をばらばら捲りながら喋る。

「シリアルキラー業界で今一番アツいターゲットはなんと言っても幼女！ つつーことでこの号は幼女特集なんだけど、『今一番』と

か言つてこれ先々々月号なんだよねー十二月号。今年入つてから一回も送られてこないのよー、つてこれも言つたけどさこないだ会つたとき」

「そうだっけ」よく覚えてない（子流丸の話の六割ぐらい流し聞きしちゃう癖があるんだけど、多分そのせい）。

「なんかねー、これ作ってくれてる人あたしの同業者なんだけどさ、つてそりゃそうだけど、で、実はその人のことあたしよく知らなくてネットで知り合つたネットだけの知り合いだからわー現代っこで、たら今年入つてぶつとり連絡途絶えちゃつて。死んだのかなー捕まつたのかなーとか思つちゃつて、まあ同業者だしその可能性はいつも付きまとつてゐるわけで全然ありえる話なんだけど、つかもしかしたら九々人、あんた殺しちゃつたんじゃないの？ 依頼受けた？ 雑誌を一人で作つてゐる何者かを殺す依頼つて覚えてねえかあそんなのーまいいや。とにかく、ここ最近毎月ずつと来てないのよ送られて雑誌、今まで毎月一日にきつちり五百部送られて来てたのにさーあーつか腹減つたんでおじさん晩飯ゴチになつちゃつていいすかね」

つらつらーと喋り終えた子流丸。父は、はつはと大口を開けて笑ひ、

「おーい早く飯持つてこーい」とバカみたいにでかい声。

「はーい」キッチンからおめの声。続いてかちゃかちゃと食器類のと思われる音。

「ああそうだ、九々人。飯の前にこれ書け。これ……あれ、どこやつたかな」

タバコをくわえながらきよろきよろ辺りを見回す父。と、ちゃぶ台の上、あぐらをかく子流丸のそのあぐらの部分をじつと見て、

「あーおい、ケツ上げてくれるか」

「ほいさー」机に両手ついて体を支え、ひょいと腰を上げる子流丸。

「ん、コルクお前ズボンの隙間からパンツ見えてんぞ」淡々と父。

「おーマジでーじゃあ拝観料五百円ね」

「おしプラス五百円出すからズボン脱いではつきり見せてくれ」

「ひーなにその要求おっさんくせえー」

「だっておっさんだからなお前、今年四十三だぞ俺」

「わー後厄」

何が可笑しいのかげらげら笑う二人。仲いいほんと。

「ああそうそう、でこれこれ、ほい九々人」

父がぐいっと子流九のお尻の下から一枚の紙を抜き取り僕に差し出す。受け取る。その紙はほんのり暖かくてもちろんそれはお尻の体温。と、にやにや笑いながら子流九が「なになに？　もしかあたしのケツの暖かさ感じて興奮した？」それを完全に無視して紙を見る僕。びつつつしり文字が記されている。一文字一文字がすり潰したゴマの粉ぐらい小さくてまったく読む気になれない。から、読まない。

「父さん」

「なんだ息子」なんだその呼び方。

「なんですかこれ」

「俺が作った契約書」

「なんの契約ですか」

「俺とお前の契約」

「なんのための契約ですか」

「お前がこの仕事をやめるための契約」

ふうと煙をたっぷり吐き出し、父は僕をまっすぐ見ながら、

「言ってたろ、お前。次の依頼終わったらやめるって」とつぶやく。

……やめる。

殺し屋を、やめる。

もちろんそのつもりだ。

僕はきっぱり言う。

「うん、やめ」がっしょーん。

テレビかなんかの効果音のお約束的何かが割れるけたたましい音。音のほうを見ると、ああめが片手に炊飯器を持ち、呆然とした表情

で立ち尽くしていた。足元には割れた茶碗と散った米。

「……くーさん、やめちゃうんですか……？」

蚊の鳴き声みたいに（鳴かないけど、鳴いたら気持ち悪いけど）小さな声で言うあおめ。

「え、うん、やめ」がっしやーん。

と今度は炊飯器を落とすあおめ。もつと散る米。

「……くーさん、ほんとに、やめちゃうんですか……？」

次やめるって言ったらぶっ倒れて自分の頭をがっしやーんしちゃうんじゃないかという想像が頭をよぎったので僕は無言。答えないと、あおめの目から大粒の涙が湧き出てピンク色したほっぺたの上をぼろぼろ滑り落ちていく。えー？　なんで泣いてんだあおめ。というか僕が殺し屋やめるのがなんでそんなにショック？　わけもわからず僕がおろおろしている間に、あおめは自分の部屋（僕の部屋でもある、一緒に住んでる）へ走り去ってしまう。

「おーおー、穏やかじゃないねー」

月刊・殺人鬼の友をばらばら捲りながら興味なさげにつぶやく子流丸。

「うーん、お前も俺に似て女泣かせになったな九々人」

タバコを灰皿にぐりぐりさせながら笑う父。頭一発殴ってやろうかと思っただけと理性で食い止め、とりあえずあおめを追おうと立ち上げ、ろうとすると、

「あー九々人。行く前に書け、ほら早く」

父が僕の腕を掴む。なんだってそんなになんとしても書かせようとするんだと訝しく思いながらもさっさとあおめを追わないと大変なこと（具体的に言うとなんか死んだり）になりかねないので、掴まれた腕を振り払い、父が差し出す筆ペンを受け取り、さらさらっと書類の最下部、狭い空欄に署名する。現九々人。^{うっくく}てか筆ペンっていくらなんでもTPOなさすぎる。書きづらい。「父さんなんで筆ペンなんですか」「筆は日本の心だからだ」だったらペンじゃなくて本物の筆渡せよと思いながら四苦八苦しつつ署名を終え、終えてか

らまあとりあえず軽く文面読んどいたほうがいいかなーと書類に目を通す、けど文字が小さすぎて最初の二行で完全に読む気が失せる。それを察したみたいに父が新しいタバコに火を点けながら、

「それ、要はだな、お前が二十歳になるまでに次の依頼を達成出来たら辞職を許可します、つてな内容だ」

「はあ……なるほど、条件みたいなもんですか」

「お前に簡単にやめられると、この世界で生きるの苦しくなるからなあ、俺。だからいいだろこのくらいあっても。ちよろいだろ？」

なあ九々人」

二十歳になるまでに達成、か。

ということは、つまり四月二日まで。

ということは、あと一ヶ月と一日。

ということは、全然余裕だ。

というか、なんで口で簡単に言える内容がこんなびつちり文字だらけの真っ黒な書類になるのかとひしひし怪しさを感じつつ、でももうサインしちゃったししょうがないか、とも思う。まだまだ寝起きだしなんだか頭がふわふわしてる。ああ、そんなことよりあおめだ。とりあえず、

「了解わかった頑張ります」

と全くこもつてない（色んなものが）言葉を吐き、僕は立ち上がり自分とあおめの共同部屋に行く。ドアを開け、ようとするけど中からガタガタガシャガシャ激しい音が聞こえてきて開けるのを躊躇する。と、背後から何かがブンと僕の頭を掠めて飛んでいき、目の前、ドアにぶち当たる。どん。きき。ゆっくり開くドア。足元を見ると、落ちているのはトンカチ。振り返ると子流九が立っていて、僕を見てにへーと笑う。

「……ん？ 今、殺そうとした？ 僕のこと」

「んーん、トンカチ投げる練習してただけー。実はあたしハンマープロス役のオーディション受かったちゃってさー」

そりゃ大役だなと思いいながらドアのほうを向き直ると、トンカチ

の衝撃でゆっくりききつと開き始めていたドアはもう完全に七分開き。部屋の中が見える。声が聞こえてくる。おおめの、おおめとは思えない声。声というか、息遣い。

ふうー、ふうー、ふうー。

荒くて熱っぽくて不規則な、野犬みたいな息遣いが聞こえてくる。息遣いの主、おおめは床に膝を付いてぺたんと座り込み、抱き締めたウサギのぬいぐるみ（僕が去年のクリスマスに買ってあげたやつ）の腹の中に手をつっ込んで綿を取り出し引っ張り出し、引っ張り出しては投げ散らかし、ときにその綿を口に入れては飲み下し、していた。怖。と、こつちをぎろつと見るおおめ。ふうー、ふうー。

「なんだよなに見てんだよブタ男食い殺すぞてめえ」おおめの口から発せられる地鳴りみたいな低い声。「おいお前だよ聞いてんのかおいそのケツ穴男じろじろ見てないでこつち来いよほら来たらお前の肛門取り出して食って俺の肛門から出してやるからひひひひお前の肛門」うん。まあ、ぱつと見、悪魔なんかに憑かれてるみたいだけど実際はそうじゃない、というか悪魔憑きのほうが万倍マシだと思う。これは、紛れもないおおめ自身のもう一つの顔。おおめに混じっている呪われた血（大げさかつダサイ言い方だけど嘘じゃないのでしょうがない）。僕を睨みながら笑いながら口の端からよだれ垂らしながらじわじわゆっくり立ち上がるうとするおおめ。あーまずいまずい。急いでポケットから携帯用千歳飴（一口サイズにカットされてる上に一粒一粒個別包装といういわゆるハイチュウ状の世にも珍しい）を取り出し、ぽいっとおおめに投げつけドアをばたんと閉める。鍵をかける（世にも珍しい外鍵）。ふうと一息つきながら振り返る。と、子流丸が携帯を構えていた。

「なにしてんの子流丸」

「へへ、いやーいいショットが撮れたわ。もう、そのものって表情してたよ一瞬、おおちゃん」

「あそ」

というその僕の「そ」の音にかぶるぐらいで部屋の中からぐおー

ぐあーと野犬の鳴き声みたいなの、みたいなというかもう、そのものな声が響き渡る。それをBGMに子流九が満足げな顔で携帯をしまふ。

「うーんマジでいつ見ても良いよねーあおちゃん。さすがはチカちゃんの孫！ つつつてね」

* * *

結論から言うと、布乃目ぬのめあおめは、チカちゃんという人物の孫娘だ。チカちゃん。本名、アンドレイ・チカチロ。ロシア人男性。1994年没。あおめの母方の祖父がこのチカチロさんに当たる。要するにあおめはいわゆるクォーターだ。ぱつと見それらしいところはないんだけど、昼の太陽の下でじーっくり見ると髪の毛が若干、薄い金色に見えないこともない。あと左目がちよつとだけ青い（これは僕の気のせいかも知れない）。で、ちなみに、僕とあおめは兄妹なんだけど（あれこれ初出？）僕にそのロシアの血は混じってない。なぜかっていうと単純で複雑な話、僕らは母さんが違うからだよ。なぜかっていうところの腹違い。父さんは一緒に母さんが違う。なぜかっていうと単純で不純な話、父が『女泣かせ（原文ママ）』だからだ。ちなみに父いわく、僕が一番目の息子だそう。だから（だからっていうのもよくわかんないけど）父と僕は苗字が一緒なんだとか。そして更に父いわく、僕の弟妹は全国に二十人ほどいるとかいないとか。それを全て集めれば願いが叶うとか叶わないとか叶わなくていいしなんか怖いから僕は出来るだけ会いたくないとか。で、その二十人の弟妹の中の一人があおめで、あおめのおじいちゃんはロシア人のアンドレイ・チカチロさんで、チカチロさんはリアルキラーだ。そう殺人鬼。でもただの殺人鬼じゃない。殺人鬼界で知らない人はいない、殺人鬼の中の殺人鬼。……らしい。子流九が言うには、「あのさ、僕あんまりわかんないんだけどさそっちの業界のこと、そんなに有名なの、あおめのお祖父さんって」

「教科書に載るレベルよ」

「なんの教科だよ気持ち悪い」

「いい？ 九々人。アンドレイ・チカチロつつうのはさ、人数的には五十人そこで別に大したことないんだけど……えーいやだつてだつたらあたしとかあんたのほうが断然殺ってるよね？ でしょ？

うん、違うの。すげえのは人数じゃなくて殺り方なのよ。なんていうかなあ……骨にしちゃうのよね、人を。骨にちよつと肉がこびりついてんなーぐらいのとこまで完全に解体しちゃうのよ。いや必ずしも全員をそうしてるわけじゃないんだけどさ。あ、であと、食うのね。死体。いや食うのは別普通なんだけど食う部分がねー肛門と、子宮が好きなのねチカちゃんは。ちっちゃい女の子の子宮は甘いんだってさ。少女の梨って呼んでたらしいよ子宮のこと。へへ。

詩人だよねえ。であとなんだっけ、すごいとこ。死姦とかはまあ当たり前前にするんだけど、たしなみとして、あ、でもねチカちゃんは食いながら殺りながらやつちゃうみたいなどこあつて、これ貪欲でかつこよくない？ 文字そのままの肉食系つつーか。あのね、生きる人間の体にかじりつきながら殺りながらやつちゃって、でもやつちゃうつて言ってもチカちゃんイポ（注・僕の意志で伏字にした）だからデキないから一人でオナ（注・僕の意志で伏字にした）しちゃうのね食いながらくちやくちや噛みながら肛門とか子宮を。

なんだろうねーその姿勢、哀愁漂うというか可愛いよねなんか、へへ。あ！あと肛門ってどういう味するだろうね、これすげえ気になつてんだけどあたし。味というより食感を楽しむものっぽいよね肛門。てかその前に、肛門ってあの穴の部分のことじゃなかったの？

そういう疑問湧くよね？ だつて肛門食うつてドーナツツの穴食べるみたいな不可能世界的感覚するんだけどそういうことじゃないのかねえー。肛門っていう器官があるわけ？ あるならどっからどこまでが肛門？ 全然わかんないやあたし。ねー九々人、肛門のこ
とわかる？ 肛門」

「あのさ子流九」

「なによう」

「ごはん食べてるときに肛門肛門連呼するのやめてくれないかな」
ホテルに向かって走る車の中。あおめが握ってくれたおにぎりを食べながら、子流九と電話している僕。なるほど。肛門のこと考えながら塩味のおにぎり食べると車に酔うってことを知った。「てか子流九なんで電話してきたの」「えーだってせっかく壁よじ登ってまでして家寄ったのにあんたらさっさと仕事行っちゃうからなんか話足なくてさー」「あそう」「でさ肛門の話なんだけど肛門って」電話を切る。電源ごと。

車。依頼人の日ノ氏が手配した何やら黒光りする高級車。室内にずっと漂う他人の車独特の他人の車くささ（いやそうとしか言いようがないよねあの匂い）。乗ってるのは後部座席・僕とあおめ、運転席・黒スーツに白い手袋そして白髪の上品な初老男性（この人一言も喋らない）の三人。今、時間は夜の十一時過ぎ。チカチカの血が騒いでしまったあおめが千歳飴を食べて落ち着いてから間もなく父が「車、迎え、来てるぞ、外」とソファに座ったままビール片手に「あー言い忘れたけど日ノさんが経営してるホテルで泊り込みの依頼だ今回は。そんじゃ、気をつけて行ってこい。期限は一ヶ月、お前の誕生日デッドライン。くれぐれも頑張れよ九々人お」とかなんとか微妙に呂律の回らない口調で言うのでテーブルの上を見たら空いたビール缶が二本（ごつい見た目のわりに下戸）。僕も来月二十歳になれば父さんの晩酌相手とか出来るようになるわけだけど全然気乗りしないからしないでおこうと親子晩酌妄想を始める前に切り捨てた夜十一時前。から数分たって今。車は走る夜の町。暗いけど明るい窓の外をばーっと見ながら、おにぎりを食べ終え指にくっつく米粒をなめとりなめとり隣に座るあおめに声をかける。

「あおめ、依頼の内容ってさ、父さんからなんか聞いている？」

……。

無音で十秒過ぎる。

あおめを見る。あおめは月刊・殺人鬼の友をじっくり読みふけっ

ている。

「えあおめ、なんでそれ持ってきたの？」

「えーだって一ヶ月も滞在するんですから暇じゃないですかー」

「暇だからって別にそんな本読まなくなつて」

「甘いですねーくーさん。結構面白いですよこれ。なんと今、殺人鬼さんたちの間では幼女が流行ってるらしいんです！」

「うんそれ子流九に聞いた」

「私たちも流行りに乗り遅れないようにしなきゃですね！」

「うんそうだね（めんどくさくなつて適当に返した）。というかなんでわざわざ滞在しなきゃいけないんだろ？知ってる？」

「……うー酔つてきました」

「車の中で殺人鬼の本なんか読むから」

「ばたんと雑誌を閉じ目を閉じ、くつたりと横（厳密に言えば斜め）になるあおめを尻目に、僕は窓の外をぼんやり眺める。この車ここに向かつてんだろ？。聞かされてない。ホテルに行くつてことだけ。ホテル。」

「だいたいこういうとき舞台（舞台つて言い方もなんだか気持ち悪いけど）になるホテルつて、それはそれは立派で豪勢な金持ち御用達のホテルか、もしくは痩せこけた婆さんが一人で経営してるぼろぼろのホーンテッドマンションのホテルか、もしくは日本からはるか離れた太平洋沖に浮かぶ南国の孤島の小さなリゾートのホテルか、の三択だと思う。うーん、どうせなら金持ちホテルがいいなあ」と期待半分希望半分でちよつととうとうとしていると車が止まる。

「現九々人様。布乃目あおめ様。……到着しました」

「一瞬誰の声かわからなかった。あおめの声じゃないし僕の声じゃないしという消去法でこの声の主が白髪 of 運転手のものであると判断。」

「あのー、運転手さん」後部座席から声をかける。

「はい、なんでしょうか」運転席に座り前を見たままの紳士。

「その声、地声ですか？」

「はあ、ええ」

「失礼ですが、おいくつですか」

「歳ですか？　今年で七十二になります」

「へ、は、そうですか（予想より歳いってて驚いた、六十ちよいぐらいだとばかり）あー、じゃ声変わりって終わってますよね」

「ええ、六十年ほど前に」

「ですよ、うん。ありがとうございます」

運転主の声は、うーん、たとえば朝、電車の中で友達ときゃっきや笑いながら昨夜見たテレビとかの極々つまらない話を楽しそうに喋る春先の女子高生をイメージしてもらいたいんだけど、うん、ほぼそんな声だ。でも運転席に座ってるのは間違いなく白髪の七十二歳、男性。

「運転手さんすみません、あの、『先輩、もしよかったら……一緒に帰りませんか？』って言うてみてもらえますか？」

「……はあ……先輩、もしよかったら、一緒に帰りませんか？」

おお。普通にちよつときつとした。

「じゃあ、『実は私、先輩のこと……ずっと、ずっと好きでした！』って言うてもらえますか？」

「……実は私、先輩のこと……ええと、なんでしたっけ」

「ずっと、ずっと好きでした、です」

「ずっと、ずっと好きでした」

おお。間にトラブルを挟みながらも結構グツときた。これは相当僕好みの声かも知れない。うーん。でも僕、客観的に見ると七十二のご年配相手に何してるんだろ。よし、客観的に見るのやめよう。というか着いたんだった。着いたんだよな。「着いたんですか？」

「はい。到着しました」うーん、声可愛いな運転手さん。こんな声の子がもし学校にいたら顔がそこそこブスでも惚れる自信ある。まあいいや、とりあえず車降りよう、の前に「おおめ、着いたよ」隣を見る。おおめは完全に斜め七十度くらいの角度で傾き座席にもたれるというかめり込むようにしてすうすう寝息を立てている。「あ

おめ」すうすう。「ああめ」すうすう。「ああめ」すうすう。もういいか。ああめをほつといてドアを開け一歩踏み出し車を降りる。夜。ひんやりした空気と踏みしめるアスファルトの硬さ。目の前を見る。

さつき、僕は三つの可能性を考えた。

金持ちホテル。ホーンテッドホテル。南国リゾートホテル。ただ今、目の前にそびえ立つホテルはそのどれでもない。

正面玄関上方に堂々とゴシック体で書かれたホテルの名前、それは。

「……西成^{せいせい}イン、ってこれ」

紛うことなく。

紛うことなく、ビジネスホテル。

……わー、すごいテンション下がってきた。

二話 少女は赤の中で暮らす（そこにある死の危険）

目の前、職員室にあるような事務机、その椅子に腰掛ける日ノ人成氏に向かって僕は言う。

「三百です、ざっと」

日ノ氏は真ん丸い眼鏡の奥の小さな目を、最大限真ん丸にする。

「はあ、それは……予想以上でした」

まあそうだろうな、と思いながら、僕はふわとあくびをする。

「それで、現さん……その、こんなこと訊いていいものかどうかわかりますか」

「彼女はいませんよ」

「え、あ、そうですか……いえ、そうではなく」

「ああめですか？ あれはただの妹です」

「はあ、いえあの、そうでなく」

「なのでもし欲しければ差し上げます」

「現さん、あの、私が訊きたいのは」

「あおめのスリーサイズとかは知らないですよさすがに。まあ並つてとこだと思います」

「あの、そもそも私、そのあおめという方がどなたなのか、よく」

「あ、そっか。あのですね、あおめつてのは僕の妹で、助手で、今車の中で寝てます」

「そうですか、え、起こして差し上げなくていいんですか？」

「いいんですいいんです。助手つて言っても大して役に立たないし、僕が意図してない余計な殺し勝手にしちゃうし……うーん、こう考えるとあおめつてむしろちょっと邪魔」どさどさっ。背後から物音振り返ると、我こそは呆然という猛者が全国から集まった第一回呆然コンテストで見事グランプリを受賞できるくらい呆然とした表情のあおめが、半開きのドアの向こうに立っていた。足元にはボクシングのトレーニングで使うサンドバッグが二つ転がっていて、え？

と思つてよく見るとそれはパンパンに膨らんだドラムバッグつまりドラム型旅行カバンだった。で、あおめを見ると、ぽろぽろぽろと大きな目から大きな水滴が溢れ出していて、あ、これまじいなと思つた僕はすかさず前言の『あおめつてむしろちょっと邪魔』に繋げて「だと思われがちなんですけど！ 全然邪魔じゃないんですよこれが！ ほんとにあおめにはいつも助けられっぱなしで！ それにあおめが家に来てからのこの一年間、毎日が嘘みたい楽しんでくつて！ 充実してて！ ああ僕は最高の妹に恵まれてるなって！

神様に感謝してるんです！ 僕は幸せです！」

現状思いつく限りの口から出まかせを一通り出まかし終え、恐る恐るあおめを見るともうすっかり泣き止んでいた。むしろほんわか笑つてた。ああ、単純つて可愛いなと思つた。

「あ、やっと来たのあおめ。遅いよ」とか我ながら白々しいセリフ。
「えへへ……ごめんなさい」

少し顔を赤らめて、にまにましながら巨大なドラムバッグ二つを抱え、とてとて部屋に入ってくるあおめ。

「というかあおめ荷物多くない？ そんな親の仇みたいなかいバツグ二つもいる？」

「えーだつて一ヶ月いなきやかもなんですよ？」

「それどう見ても半年分あるよ荷物量」

「うーん、私、旅行つてしたことないんで……ちょっとわくわくし過ぎちゃったかも知れないですねー……えへへ」

この『旅行したことない』っていうキーワードは深く掘り下げるときつとブルーな話になるなとピンときたので僕はそれ以上突っ込まない。これが優しさ。で、

「えー、なんの話でしたっけ」

僕が訊くと、日ノ氏はぽかーんとした表情で僕を見て、

「え？」と言う。

「いや何かの話の途中だったような」

「はあ、そう、でしたかね」

「おそらく」

僕と日ノ氏が首を傾げながら中断された自分たちの会話の続きを思い出す作業にふけている間、あおめは部屋の隅っこにしゃがみ込んでドラムバッグを開けて服とかお菓子をとり出しては「服よし」やら「お菓子よし」やら、指差し声出し確認をしていた。しばらくそれをぼーっと見てたら思い出した。

「何か僕に訊きたいことがあるんじゃないかなかったですか？ 日ノさん」

「あ、ああ、そうでした。ええと……」こぼ、と小さく咳払いをし、日ノ氏は声を潜め、「今までなさってきた三百の中で、その……特に大きな事例は、こういうものがありましたか」なるほど。

心底くだらない質問だ。と、思いつつ、
「大統領殺しですかね」

さつと、日ノ氏の顔色が変わった。具体的には、肌色からうつすら黒っぽい赤色に。

「それは……あの、もしかして」

「あー国の特定とかはやめときましよう。どこで何をどう盗聴されてるかわかったもんじゃないし、ああ、別にこれは日ノさんを疑ってるとかそういうわけじゃないですけど」

「……はあ、しかし」

明らかに動揺（緊張？）した表情（タモリ的なレベルの芸能人生で会っちゃってどきどき、みたいな表情）の日ノ氏を見ながら色々思い出す。大統領殺しって言っても別にそんなに大変じゃなかったんだよなあー電話したただだし。ああでもインドネシア語を覚えるのは大変だったな。あ、あと国際電話の電話代こっち持ちっていの聞かされてなかったから翌月お金が相当苦しかった。子流九にちよつと借りたりした（まだ返してないやそう言えば）。

「あの、他には、どういう」

おーおー欲しがるなあと日ノ氏を見ながら感心半分呆れ半分。まあ依頼主である日ノ氏としてはこっちの実績はそりゃ気になって当然か。しょうがないので、

「やくざ一組丸ごと皆殺し、とかですかね」

うーん。事実なんだけど口に出して言うともめっちゃくちや安っぽい。漫画ゴラクみたい（いや批判してるわけじゃなく）。それでも目の前の日ノ氏は、

「や、それは、もしかしてあの」とか早口で食いついてくる。

「あー組の特定はやめましょう」

「はあ、はい……それで、他には」

どれだけ欲しがるんだよと思いつながら、うーんと考え、

「そうですね、なんだろ、いわゆる新興宗教団体？　みたいなのを潰したことがありますね。うん。これは簡単でした。集団自殺とかしそうじゃないですかそういう団体。だから結び付けやすくて。これ結構面白かったんですよ、やってて、我ながら手際よかった

というか、うん。あ、これ手順としてはですね、まず教祖を」

「あー……すみませんが、そろそろ肝心の依頼内容、お話ししたいでしょうか」

うわー急に食いつきが失せた。自分から訊いてきたくせになんだよこの態度の急変。腑に落ちないまま、とりあえず頷く。日ノ氏は背中を丸め前傾姿勢になり、丸眼鏡を小さくずり上げ、僕をじつと見る。

「……娘を、殺して頂きたいのです」

ふん。

そんなとこだと思った。

脳裏に浮かぶ自宅で見た依頼書。

『依頼人「日ノ人成」 依頼大賞「日ノ海」』

あ。“大賞”の誤字、教えるの忘れた……まいいか。

「娘はこのホテルの七〇七号室で暮らしています。現さんたちは同じフロアの七〇三号室にお泊まり頂き、これから娘の家庭教師ということでひとつ、上手いことやって頂ければ」

なんで娘さんホテルで暮らしてんだと当然のように疑問が湧くけど別段仕事に関係ないので詳しくは訊かない。黙ってこくこく頷いておく。

「しかし」

日ノ氏が急に声のボリュームを上げる。ドスの利いた声。華奢な外見に似つかわしくない声。

「……条件が一つ、ございます」

眼鏡の奥の目が光る。いや眼鏡が光っただけかも知れないけど。どちらにしても妙にキラキラした顔色の日ノ氏。

「娘の描いている絵が、完成してから、殺して頂きたいのです」

「……絵、ですか？」

「ええ、絵です」

「絵？」

「ええ」

「え、絵？」

「ええ、絵」

「え？ 絵？ ええ絵？ え？」

「……あの、現さん、話し先に進めていいでしょうか」

「あ、どうぞ」もうちよつとエの音で遊んでいたかった名残惜しさ。

こほん。小さく咳払いをし、日ノ氏がまた声を潜める。

「単刀直入に言うんですね、娘は、絵の天才なのです。……実は、

この西成イングループは、娘の絵を売って得た資産で築き上げたもののなのです」

「……はあ、それはそれは（うわーすごい嘘くさいなというか自分が大学で絵の勉強してるだけに絵の天才とかいう単語にわかに信じられないなというかまず自分の娘のこと天才って言うか？ 言えちやうか？ 親バカにもほどが）……ん？ でも、なら、なんで殺すんです」

そこで日ノ氏はより一層前傾姿勢になり、より一層声を潜め、もうほとんど吐息のような音量で言う。

「娘の脳を買いたいと言う学者がいるのです。なんでも、某国の脳科学の権威だそうで、娘の絵をオークションで度々、高額購入していた人物なのですが……絵だけでは物足りなくなつたのか、その絵を創り出す、脳が欲しいと」

うーん。なんだか急にマッドな話になってきた。僕こういう眉唾な話、あんまり好きじゃないんだよねーと内心辟易しながらそれを顔には出さず「なるほどふむふむ」とか適当な相槌を打つ。

「まあ、ということ、ですね。まとめますと」

じつとり湿った目で僕を見る日ノ氏。

「守って頂きたいことは、三つ。

一つ、娘の脳に損傷を与えないでください。 脳がダメになると、

元も子もないですからね。

二つ、絵が完成するまでは娘を死なせないでください。 娘が今

描いている絵は、遺作としてももう高値で買い手が付いているのです。

三つ、絵の完成を見届けたら速やかに殺してください。先方は娘の脳が送られてくるのを今か今かと心待ちにされています。一刻も早くお届けしたいじゃないですか、こちらとしても。

……では、くれぐれも、よろしくお願い致します」

「……わかりました」

って言って気づいたけど今、結構適当に聞いてた。やばい一つ目がもう思い出せない。メモつといたほうがよかったな、と思って「あーすみません、あの、条件、もっかい言ってもらえますか？ あおめ、メモとかある？」「はいどうぞ」ずっとメモ用紙（片面印刷のチラシを四角く切って束ねて右上に穴開けて紐通してまとめた往年の主婦が作りそうなやつ）と筆ペンを差し出してくるあおめ。受け取って、「さすがあおめ」軽く頭撫でてやる。「えへへ」すばんと筆ペンのキャップをはずす。「じゃ、もっかいお願いします」てかまた筆ペンか。デジャヴ。

* * *

「ふうん、ま、珍しいことじゃねーよ全然。知ってる？ いや知らないと思うけど、研究のためとかなんとかでチカちゃんの脳みそを買いたがってる日本の商社があるって噂あつてさ、ん？ いやいやあくまで噂で、実際は誰も買ってないんだけど。でも買って研究してどうすんだろうね？ チカちゃんのね、フランケンシュタインみたいな作ったりすんのかね？ わかんねえけど。あーで、あたし思ったんだけどさ、あおちゃんのもさ、脳みそ、そこそ高く売れちゃうんじゃねえのかなーとかさ。いやだってチカちゃんの血い混じってんじゃん。買ったがるどっかのバカがいてもおかしくないよねー？ へへへへへ、え？ いや別に今の笑いに深い意味はねえよ？ うん。あおちゃん殺そっかなー殺して脳みそ叩き売っちゃおっかなーってだけで、それ以外の深い意味は全然。へへへ、へへ」

「子流丸、ビール何本飲んだの」

「二」

「二二？」

「ケース」

は、とため息が口から勝手に漏れた。どうりで受話器の向こうから酒臭い息がぶんぶん漂ってくるわけだ（言葉のあや）。「あー、じゃ僕、忙しいからこれで。あれだったら僕の部屋に泊まっていいから、布団とか勝手に敷いて」「あ、もう敷いてる、し、入ってる、し、さつきちょっとゲロ引っ掛けちゃった。悪りい。へへ。うへーくせー、へへへ。でもまあ親愛なるあたしのゲロだし見た目もゲロの中では割かしい色したゲロだしこれなら九々人ゲロ得ゲロ得」電話を切る。は、ともう一度ため息。ん。視線を感じる。顔を上げる。ホテルマンが僕を訝しげにじっと見ている。目が合う。ホテルマンの目はビー玉みたいに青くギロギロ光っている。思わず見とれてしまう。数秒。

「……あの、お客様、私の顔が、どうかしましたでしょうか？」

「あー、なんでもないです。というかすみません、電話、長々使ってますって」

「いえ……かまいませんが」

壁に掛かっている時計の針はもう深夜一時過ぎ。そりやまあこんな時間にフロントに酔っ払いから電話かかってきて（ちなみに僕が携帯の電源切ってたからわざわざホテルにかけたんだとか）、そのまま長々十分も二十分もくっちゃべって、更に受話器の向こうから脳みそだのゲロだの殺すだのいう不穏な言葉の断片が漏れ聞こえてきたら健全なホテルマンなら訝しく思っただけだよねーと、しみじみ思う。しみじみ思いながら再度まじまじホテルマンの顔を見る。見ながら訊く。

「あの……ちょっとお伺いしたいんですが」

「なんででしょう」

「その目、ビー玉ですか？ あんまりにも青く透明に光ってるので」「いえ、違いますよ」

うん、そりやそうだ、我ながらバカくさい。と、ホテルマンが静かに顔を右手で覆い、かくんと小さく首を揺らした。それから手を離し「どうぞ」手のひらを僕に見せる。そこには青く光る球体。

「これはビー玉ではなく、スーパーボールです」

なるほど、こうやって見ると確かに青くて透明だけどビー玉とは全然違う、よく跳ねそうなゴムっぽい球体。顔を上げる。右目の部分がぼっかりほら穴みたくなってるホテルマン。うわー、これ今日夢に出そう。すぐ目をそらす。

「あの、ありがとうございました」

「いえいえ、それではごゆっくり」

なんでも訊いてみるもんだなあと思いながらそくさフロントを後にする。後にするって言うてもほんのちよつと離れるだけ。正面玄関入ってすぐ脇にある小さな休憩スペースへ。所要時間わずか十秒足らず。一人がけのソファが四つ、大きなガラスのテーブルが一つ。ソファはテーブルをぐるっと囲むように並べてあって、上から見たらきつとサイコロの五みたいな感じに見えるだろう間取り（間じゃないけど）。の、ソファの一つにちょこんと座って、あおめは例の雑誌を読みふけていた。

「あのさあおめ、いくら人が少ないとは言え公共の場で月刊・殺人鬼の友読むのはTPOなさ過ぎるかな、うん」

「え、あー、すみません……ふあ」ぱたんと雑誌を閉じながらあくびをして、慌てて口を手で押さえ「うあ……すみません」あおめ、二度謝る。

「眠いかあ、ま、そりやそうか、じゃあさつさとターゲットと顔合わせただけして、早く寝よう」

「はい！」あおめがすたつと立ち上がる。手ぶら。手ぶら？

「あれ？ 荷物は？」

「あ、ホテルマンの人が先に持っていつてくれましたー。優しいですよね！」

「まあそれが仕事だしね」

「そつかあ、人に優しくするのがホテルマンのお仕事なんですねー」
「うんそうだねー（めんどくさくなって適当に返した）」

まあでも、ビジネスホテルでそんなサービスって普通ないよなあ
と思い、やっぱり日ノ氏の招いた客ってことで待遇良くなってるん
だな僕ら、とその事実になんだかちよつと楽になる心。フロント
で鍵を受け取り、鍵の番号を見、「七〇三」呟いて確認、エレベー
ターホールへ向かう。ととて後ろからあおめがついてくる。上ボ
タンを押す。

「そういえば、くーさんが電話してる間、何人が私の前、通って行
きましたよー」

「え、ほんとに？」背向けて電話してたから全然気づかなかった。

「なんかですねー、黒い服着た男の人とかあ、黒い服着た女の人と
かあ、黒い服着たコルクさんとかあ」

「ふうん」ちーん。エレベーター到着。開く。中には誰もいない。

乗り込む。7のボタンを押す。閉まる。ころころりん、と電子
的な木琴の音が聞こえる。あおめがわたたと制服の胸ポケットか
ら携帯を取り出した（ちなみにあおめは制服で学校に行き制服で外
出して制服で寝る制服ヘビーユーザー）。

「なに、メール？」

「あ、えと、はい」

「こんな時間に？」

「あ、はい……」

「誰から？」

「……………あ、はい」とまるで噛み合わない返事。メール読むのに
夢中で上の空らしい。ちん。到着。七階。開くドア。降りる僕。降
りてこないあおめ。

「あおめー」

呼びかけてもあおめは相変わらず携帯を見たまま「……………あ、はい」
とか言うだけ。その表情はなんだか少しはにかなんでいるようにも見
えて、うーんこれってもしかしたらもしかしてと思い「そのメール、

男から？」と訊くと即反応、携帯から顔を上げハッとした表情で僕を見て「え、ちっ、違いま」しゅううーと閉まるエレベータードア。絶妙。ドア上の階数表示ランプが1と書かれたほうへどんどん進んでいく。さよならあおめ。とりあえずこのままここで待つてるのも手持ち無沙汰なので一足先に部屋に向かう。

落ち着いたトーンの茶色のカーペット。その上を音もなく歩いていく。静かな廊下。そりゃそうだ。もう深夜。ビジネスホテルっていうぐらいだからビジネスに使う客が多いわけで、ビジネスってことは朝がめちやくちや早い(ってイメージある)わけで、ということとはみんな早く寝てるわけで、ということは当然こんな時間に廊下歩いてるのなんて僕一人ぐらいのもん『とす』という小気味良い音と共に目の前に突如現れたそれ。壁に突き刺さったそれ。びよんびよんと上下に揺れるそれ。バトル・ロワイアルにおける男子一番・赤松義生の武器であるそれ。それ。そう。

ボウガン。

うーん、ほんもの初めて見た。思ったより丈夫そう。上手くやれば象とか殺せそう。さて考える。僕から見て右側から飛んできて左側の壁に突き刺さったボウガンの矢。ということで、必然的にどうか本能的にというか機械的にというか、右側、ボウガンを撃った人物のいるであろう方向を見る。

黒いパーカー。

黒いキャミソール。

黒いホットパンツ。

白い肌。ちよつとだけ赤い頬。

僕の部屋の、僕の布団に入っているはずの九流子流九が、にやにや笑顔で立っていた。ボウガンの本体片手に。

「えっす。おばんちわー」

「何してんの子流九」

「マンハント」

「わー物騒」

「ねー物騒」

「……ところで子流九、僕の家で僕の布団に入ってたんじゃない」

「あーあれ嘘。あの電話してるときあんたの後ろ歩いてたもんあたし。さながらもしもし私メリーさん」

「へえ。じゃあ今回は壁登ってこなかったの」

「バカヤロ酔ってるから無理に決まってるんだろ。飲酒登壁は危険なんだぞう、ううー」

げふう、と酒くさいゲツプを一発かましてくすくす笑いながら子流九は懷から矢を取り出しボウガン本体にちゃちゃっとセットして「はいチーズ」僕の眉間に狙いを定める。

「……あー、あのさ、死ぬ前にひとつ言い残したいんだけど」

「おうおうなによう」

「子流九はさ、『アート・キラー』でしょ？ ボウガンで僕撃ち殺して、それ何の作品に見立てたつもり？ どういう意図の殺人？」
「う」

子流九がボウガンを構えたまま固まる。

「僕あんまりシュルレアリスムとかダダとか詳しくないけどさ、矢が人に刺さってるだけって、そんなモチーフなんだか安易すぎてその辺の流れに沿ってない気がするんだけどなあ」

「……うう」

「子流九の殺してもっとこう、破壊的というか、衝動的というか、そういう熱？ みたいのなかったっけ？ ボウガンで撃ち殺してはい片付いた、そんなつまらない殺しするようになったの？ だとしたら僕、ちよつと……悲しいよ」

「……うう、うう」

低く悔しそうにうなりながら子流九がボウガンを下ろした。口から出まかせ成功。ふうと安堵のため息的息が漏れる。ま、相手が子流九であろうが誰だろうが、僕の口に叶うわけがない。この口が、口だけが、僕の唯一の武器なんだから。

子流九がずるずる壁に寄りかかりぺたんと力なく床に座り込む。

「あたしさあ……うー……最近スランプなんだわ、マジで」

珍しく弱い声を出す子流九に、なんだかちょっとわくわくした。そんな僕のわくわくを知る由もなく弱いまま喋る子流九。

「今日さ、あんたんち寄る前に仕事してきたつつたじゃん。あれもさ、実は上手くいなくてさあ……腕もいだりとか、目引っこ抜いたりとか、一応やってはみたんだけど全然しっくりこないつつうが無理してやってる感があって……なんかこう、湧いてこないんだよね、衝動が。そう、衝動、衝動……うん、はあ」

わーこれはだいが参ってるな子流九、と見たことない聞いたことない彼女の弱音にどう言葉をかけたものか頭を掻き掻き迷っている、エレベーターホールのほうから、

「あーコルクさん！ さっきぶりです！ コルクさんも七階なんですか？」

やっと戻ってきたあおめの嬉しそうな大声。深夜だつていうのにあまりに思慮の足りてない大声。そんなこと気にもせずあおめはぱたぱた音を鳴らして小走りで近寄ってきたがなおも大声を張り上げる。

「コルクさんさっき一階で、電話しながらつつーってあたしの前通り過ぎて行っちゃうからわーと思っただんですよー？ 無視されちゃったのかなあって思っ、ちょっと落ち込んでたんですから、もー」

その子流九はというと、カーペットに寝っ転がってすびすび寝息を立てていた。「あれー？ コルクさん寝ちゃったんですかー？」

喋るあおめと寝る子流九。うーんどうしようもない。そして迷惑この上ない。ホテルに対して申し訳ない。というかあれ？

僕なにしようとしてたんだっけ？

* * *

僕なにしようとしてたんだっけ？ の答えは以下のとおり。

寝ちゃった子流九の世話をあおめに任せてあおめに部屋の鍵も渡

し、ターゲットである少女・日ノ海のいる七〇七号室に向かいノックしようと思つて手を止める。冷静に考えればもう夜中の三時近く、こんな時間に今日から雇われました家庭教師です明日からよろしくねとか言いに来る奴はどう考えたって怪しいし怪しいと思われちゃうのは僕の仕事的に百害あつて一利なしだし、じゃあもういいや今日はやめとこうつてことでなんにもしないまま七〇七を後にする。少し歩いて、僕が今日から泊まる部屋・七〇三号室に入るとあおめと子流九がシングルベッドですやすや気持ちよさそうに並んで寝ていて、しょうがないのでソファに横になった。数時間前まで寝てたせいで全然眠れなかった。以上。

* * *

「んで、どうだったのその女の子。もう殺つた？」

朝。ホテル一階奥の小さなレストランで、向かいに座る子流九が巨大ポニーテールをふさふさ揺らしながら、パンをむしゃむしゃ食べ食べ僕に訊いてくる。口の中丸見え。

「殺るどころかまだ会つてもないよ」

「とろっ。バカじゃねえの」

「というか会つてもすぐには殺れないし」

「なにそれバカじゃねえの」

「絵が完成してから殺るって決まりで」

「意味わかんねバカじゃねえの」

「僕としてもさっさと終わらせたいんだけどそうもいかず」

「バカじゃねえのバカじゃねえのバカじゃねえの」

子流九はパンをむっしやむっしやむっしやむっしや食べながらただひたすらにバカじゃねえのを繰り返す。よくわからないけど不機嫌っぽい。あの日なのかなーとかばやばや考えて、あんまりそういうこと考えるもんじゃいかなーと少し反省する。子流九はコップに並々入ったオレンジジュースをがぶ飲みし、ぷはあと一息ついて、

「で、九々人、あおちゃんは一？」

「あおめは学校」

「学校かーってそりやそうか、まだ春休みじゃねえもんね高校生は。つーかあれよね。あおちゃんよく普通に学校とか行けるよねあの体質で。大丈夫なの？ クラスメートの命は」

「うーん、大丈夫なんじゃない？ 詳しくは知らない、わかんない」
「なんだよお前無関心かよ。妹ともっとコミュニケーションとれよこのクソ兄貴いー」

へっと笑って子流九は席を立ち、パンのおかわり（四回目）とオレンジジュースのおかわり（七回目）を持ってくるべく料理の置いてあるテーブルへ（朝食はバイキング制）。しかしクソ兄貴って無茶苦茶な言われようだなあといいながらふわーっとあくびを一発かましつ、周囲のテーブルを見る。朝食をとったり新聞を読んだりテレビを見たりしている他の客たち。黒いスーツの男が数人、黒い着物を着たおばあさんが一人、黒いジャージ上下を着た女の子が一人、ついでに言えば子流九も黒のパーカーに黒のホットパンツに諸々にという黒づくめスタイル。これじゃもうレストランっていうか葬式だなと眠い頭でばやばや思う。僕だけ黒くない格好（白いシャツに青いジーパン）でとっても空気読めてない感じ。子流九が皿いっぱいのパンと並々のオレンジジュースを持って帰ってきて、がたんと乱雑に椅子を引き、どすんと乱暴に腰掛ける。

「ね、あんたさ、五月祭の準備してる？」

「五月祭って？」

「五月にある祭りよ」

「うわー聞くまでもない情報」

ああ、そういえば入学して一ヶ月たった頃つまり五月、にあったななんか、祭り。教室、廊下、食堂、駐車場、トイレ。大学敷地内のありとあらゆる場所に適当な絵（例・キャンパスの真ん中に小指の爪サイズの小さな赤い点が三つ。それだけ）なり適当なオブリエ（例・大量のリラックマのぬいぐるみをゴミ袋にぎゅうぎゅうに

詰めたもの。それだけ）なりが適当にごろごろ飾ってあった。そんな祭り。でも言ってもそういう創作物が展示されてるだけで、屋台的なものとか模擬店的なものは一つもなかった。けどあれが祭り。そうかあれ五月祭って名前だったんだ、と今、初めて知る。

「五月祭って全員参加なの？」

「別にそういうわけじゃねーけど出といたほうが楽しいんじゃない出ないよりは幾分か」なるほど正論。

「子流九って去年なに出したの」「ねーテレビのリモコンどこにあるだろ、ニュース聞きたい。聞こえない」きよるきよる辺りを見回す子流九。「あれじゃない？ あ、おばあさんのテーブルの上」

「おマジだ畜生、ばあさんチャンネル権独占かよ。ね九々人としてきて」「やだよめんどくさい」「とってこないといひどい殺し方で殺す」「具体的には？」「生きたまま目玉くり抜いてコトコト三日間煮込んでシチュー作ってたと食わす」「そりやひどい」くすくす楽しそうに笑う子流九、を尻目に、乗り気じゃないまま立ち上がった黒い着物の老婆の元へ向かう。傍まで近づいても老婆は僕を見ず、ただじっとテレビを見ている。「あー子流九、リモコンこれとってこなくても、音量だけ上げればいいかな？」と振り向きながら尋ねる。子流九はハムスターみたいに夢中でパンをむぐむぐ口の中に詰め込んでいた。全然こっち見てない。パンだけを見てる。もういいか。「ちよつと、すみません」と一応おばあさんに詫びを入れつつ手を伸ばし、テーブル上のリモコンの音量ボタンを人差し指で素早くトットと三連打、に合わせて、

『るのはミムラサクラちゃん七歳。三月一日夕方頃、小学校からの下校中に何者かに連れ去られたものと見られており、警視庁はサクラちゃんの通学路近辺の住民に目撃情』

と、まあまあ響き出すニュースの声。こんなもんでいいか音量。「ありがとうございました」と一応老婆に礼を言う。老婆は全然僕を見ない。ただテレビを食い入るようにじーっと見ている。テレビつ子め。「食後のコーヒーいかがでしょうか」横から不意に声。お

「サービスいいなあビジホ（ビジネスホテルの略、これ一般的？）の癖して。「あ、ありがとうございます」差し出されたコーヒークップを受け取り、立ち上る湯気の香りを楽しみつつ自分の席に戻る。ことんとカップ置く。「で子流九、去年の五月祭って」ぱあん！右頬にビンタを食らう。「静かにしろ、ニュース聞こえない」理不尽にじんじんするほつたを手でさすりながら僕は黙る。

『に入って都内での小学生女児の行方不明件数は七件と相次いでおり、警視庁では事件の関連性について調』

なにが面白いのか子流九は口元を緩ませにやにや笑いながらテレビを射抜くように見つめている。怖。「で子流九、去年の五月祭って」ぱあん！左頬にビンタを食らう。右をぶたれて左もぶたれてさながら僕はマハトマ・ガンジー。「黙れってば九々人、ニュース聞いてんのあたしわかる？」「わかる、わかった」

『に通う大学生クルマダエミルさんの遺体が発見されたのは、千代田区神田神保町三丁目付近の交差点で、遺体には何者かに首を絞められた痕跡があり、警視』

さっきの行方不明事件とはまた別の、なにやら陰惨な事件の報道。いつもどおりの東京の朝。テレビを見る子流九の目は朝日みたいにキラキラしていて、うーん、怖。

『頃から都内で相次いでいる一連の通り魔殺人事件に関して、警視庁は同一犯の犯行である可能性が高いと見て、エミルさん殺害事件との関連性』

「これよこれ」

子流九が急に声を上げる。

「このパッション。情熱。あふれ出るエネルギー！東京ってすげえよね、あたしらが小学生だった頃からなんにも変わってないよね。毎日のように事件が起こって人死にが出て。いいよね。いいよね。これよ。これなのよ。今のあたしに足りないパッションは！」

子流九は喋ってるうちにどんどん勢いづいてきたのか知らないけど唾をぱっぱ飛ばしまくりながらバシバシ手でテーブルを打ち鳴ら

していて、うーんめんどくさいなあと思いながらコーヒーを一口飲む。

「仕事スランプだったじゃんあたし昨日」

「え、ああ、うん」言ってたつけ、あんま覚えてない。

「あれ脱するわ、脱さなきゃさ、五月祭でいいもん作れない感じがしてんの。なんつーの、殺しの熱量とダダシユル（ダダイズムとシユルレアリスムを一緒にした造語？）の熱量はおんなじだと思ったのあたし！」あーそろそろ行きたいなあ、朝ごはん食べ終わったら食後のコーヒーも飲んだし（一口飲んで飽きた）。「あんたあれわかる？ アンダルシアの犬っていう、映画なんだけどさ、ダリが脚本やった、シユルレアリスムの、で、あれになぞらえた殺しとかやったら面白いんじゃないかってピーンと」延々喋り続ける子流九にうんうんと適当な相槌を打ち続ける僕。あーどうしよう。ほんとにそろそろ行きたいなあ。他の客たちはみんな、どんどん席を立ち始めている。どんどん人がいなくなるレストラン。そしてあっさり僕らは二人きりになる。「最高でしょ？ 絶対面白いでしょ？ あとさあたし思いついたんだけど瓶掛けってあるじゃんデュシャンのあの瓶掛けを手に入れてさ、瓶掛けるフックの部分に殺した奴の目鼻口とかモツとかを一つずつ掛けるっていう瓶掛けならぬ人掛け（じんかけ）！ どう？ ね、どう？ うぐう」

変な音を立てて突然、子流九が黙った。目の前、子流九の首には背後からしわしわの手が伸びている。伸びているっていうか、絞めている。強めで。

「えう、え、うが、ぐ」

目を白黒させて体をばたつかせてポニーテールをぶるんぶるん揺らして口の端から涎をばたばた垂らす子流九。彼女の首を絞めるしわしわの手は小刻みに震えていて、相当力入ってるってことが傍目にもわかる。で、そのしわしわの手の主はということももちろんしわしわな人で、つまり老人で、つまり先ほどの黒い着物のおばあさん。音もなく現れるとはまさにこのことで、ほんとにいつの間に、いな

なくなったと思ったのに。子流九の背後に佇み首を強く絞め続ける老婆の目は今もずっとテレビを見続けている。テレビっ子め。

「げ、げ、げ」

「え」とか「うが」とか言ってた子流九は次第に「げ」以外の音を発さなくなってきたいて、ああ終わりが近そうだなあとしみじみ思いながらコーヒを一口。うーん、それにしても凶悪殺人鬼アト・キラの最後をこんなS席で見れるとは。全然どうでもいいプレミアム感。

と、老婆が不意に手を離した。

「ぐあっほ、っはっご、ほ、がほっ、が、ごっ」

もちろんわざとじゃないのはわかってるけどどうにもわざとらしく見えちゃうボリュームの咳を何度も何度も繰り返す子流九、の背後、老婆はいつの間にかテレビではなく、僕をじっと見つめている。冷たい目。ゆっくり開く口。

「……この子、処女？」

口から漏れ出たカラカラに掠れた声。えー初対面で訊く内容がそれ、とびつくりしながらも、さっきテレビのリモコンを拝借した義理があるので（いやないけどね、別にこのおばあさんのリモコンじゃないし）とりあえず答えようと思った。けど、うーん、どうなんだろう。そんな突っ込んだ話はしたことがない。とりあえず一つ言えることは、僕と子流九はそういう関係になったことはないってことだけで、それだけじゃ答えにならないし。「おお、げっは、かは、ぐううええ」首絞め解放から数秒たった子流九がどえらい勢いで咳き込み出し、大量の唾＋リバーズしたと思われるゲル状のパンをテーブルの上にくしゃくしゃ吐き散らしていく。あ、なんか処女じゃないっぽいなあキャラ的にこういう子は、と固定観念の助けを借りながらそういう考えに至り、「あ、処女じゃないです」とさらっと答える。

老婆は、ち、と小さく舌打ちをし、たかと思うと、そのまますたすた静かに去っていった。ぽかんとその様子を見つめていると突然、

が「いーん」という鈍い金属音と共に頭部に重い衝撃が「痛っ！」真っ白、ちかちかする目で前を見ると子流九が人殺せそうな大きさのフライパンを握り締め、涙目で僕を睨んでいた。

「助けるよ！ あたし死ぬとこだっただろうが！」

「いや、うん、なんかつい見ちゃった」

「お前マジで殺す絶対殺す、殺す殺す殺す」

「はは、現職の殺人鬼に殺すって言われると逆に実感湧かないなあぐううー」

喉の奥から聞いたことない間抜けな音が出た。と、思ったらふわつと体が軽くなってぐらつと頭が重くなって。

暗転。

。

明転。

子流九がじーっと僕を上から見下ろしていた。え？

「どえー」

どういう状況？ って言いたかったのに舌がびりびりして上手く回らず、どえー。結果、図らずも、江戸を業界風に言っただけになった。

「盛られてたぞー九々人」

うわ毒か、と「盛られてた」ってワードだけで判断出来る僕もどうかと思う（まあ言ってもちよつとこの世界長い人なら盛り〓毒っでは常識なわけで、余談だけど、だから僕盛りそばって食べれない）。丸三日徹夜したみたいな視界の悪さとぼんやり加減で辺りを見回す。めっちゃめっちゃ頭重かったので首は動かさず目だけで。あ、ここレストランだ。僕床に寝てんのかこれ。

「どなう」

毒って何に？ って訊きたかったのに口から出たのは、どなう。結果、図らずも、美しく青き川の名前になった。でも子流九は僕の言わんとしたことを察したらしく、

「あんだコーヒー飲んでたでしょ？ あれだね間違いなく」

「なー（なんで？　って言ったつもり）」

「つかしいなあと思ってたんだよねあたし。だってコーヒーとかなかったんだもん、バイキングに」

「え（え？　って言ったつもり。成功した）」

「あんたあのコーヒーどっからとってきたの？」

えーどっからとってきたんだっけなあ、思い出そうにも頭が重くて全然思い出せない。うーん。とりあえず死ななくてよかった。あ、吐きそう。

* * *

「そっいえばさ、さっきフライパンで僕殴ったでしょ子流丸。あれフライパンどっから出したの」

「ん？　懐」

「ふうん。なんでもかんでも懐から出すねー」

「そうねえ。そういうところあーねーあたし。つか九々人あんた毒もう平気なの」

「ん？　ちよつと舌ぴりぴりするけどその程度」

「ふうん。あんた毒とか強い人だったっけ」

「そうだね、そういうところあるねー僕。ちっちゃい頃、父さんによく飲まされてたから」

そんな、とつてもどうでもいい会話をしながら廊下をだらだら歩く僕ら。落ち着いたトーンの茶色のカーペット。品のいい明るさの照明。等間隔に配置された小さな窓。ビジホのわりにしっかりした作りだなあと昨夜も思ったけど改めて思う。何も知らない人が内装の写真だけ見れば一流とまでいかなくても二流とまでいかなくても二・五流ホテルくらいには見えそう、な気がする。ほどなく七〇七号室に辿り着く。僕らの部屋、七〇三号室の隣の隣の隣。

ドアの前。僕は一度、小さく深呼吸して、後ろに立つ子流丸を振り返る。

「子流九。ひとついいかな」

「おう。なんでもこいよ」

「君、なんでいるの？」

「ぼかんと大きく口を開け、僕をじつと見つめる子流九の尖った目。なにそれ？ なぜあたしがこの世にいるのかってこと？ そりやお前、両親がセック」

「ああいや違ってそうじゃなくて」

「そうじゃないことあるかよお前。人は誰しも絶対セック」

「えっとそういうことじゃ」「セック」「子流九」「セック」「子流九」「セック」

「子流九。それ一旦しまおう。片付けよう。忘れよう。そうじゃなくてね、なんで、ホテルにいるの？ ってこと」

「僕の言葉に、はあ？ と大口ぽっかーんと音が出そうなくらい開け、それから、うーんと首をひねり、

「面白そうだから」

と子流九はシンプルな答えを僕に叩きつける。

「あたし面白さ至上主義なのね。面白そうならなんでもやるし面白そうならどこでも行きたいし今までずっとそうやって生きてきたし、そうやって人殺してきたし」

「あそう」面白そうで殺された人たまったもんじゃないな。

「え、あたし、いちや迷惑……？」

目をじんわり潤ませ、上目使いで僕を見る子流九。うわー確実に意図的作爲的。は、と軽くため息をつき、

「別にいいけど、仕事の邪魔はしないでね」と僕が言うと、

「おう、保障出来かねる」と不穏な返事。まあいいやもう、で。

日ノ氏から預かった七〇七号室の合鍵を、鍵穴にゆっくり差しみ静かに回す。かち。硬い感触が手に伝わる。小さく深呼吸する。ゆっくり、ドアを押し開けていく。つん、と乾いた何か（嗅いだことのある、何か）の匂いが鼻を掠める。ゆっくり、足を踏み入れる。

ゆっくり。

まず、目に飛び込んできたのは、赤色だった。

何が赤色かというと、部屋そのものが、だ。

壁、柱、カーペット、天井、そしてきっちり閉められたカーテン。ありとあらゆるものが真っ赤だった。ペンキのような赤。というか、事実、よく目を凝らして見ればそれは本当にペンキらしかった。ところどころ、乾いてひび割れている。部屋全体、赤いペンキで塗られている。その毒々しいくらい赤いカーペットへ、一步踏み出す。ぱり、と小さく音が鳴る。薄い薄い氷を踏んだような感覚が足に。歩く。ぱり、ぱり、ぱり。

部屋自体は僕の泊まっている七〇三号室と何も変わらない。テレビがあつて、机と椅子があつて、電話があつて、ソファがあつて、ベッドがあつて。ただ、全部赤い。真っ赤。だけどでも、本当の真っ赤ではなく、ところどころ塗りきれしていない部分もある。雑な、真っ赤。

「えーと……こんにちは。海ちゃん……いるかな」

いるはずの少女の姿が見えないので、おそろおそろ声をかけてみる。返事はない。部屋の真ん中くらいまで入り、ぐるっと三百六十度見回す。見当たらない。

「九々人おー、部屋、赤いねー」

すつごく見たまま感じたままの感想を述べ、子流九は赤いベッドにごろんと横になって「うひゃー布団も枕もパリパリ」何が面白いのかけられ笑い転げている。僕はそれを尻目に、とりあえずベッドに腰掛ける。うーペンキくさい。気持ち悪。

きき、という音と共に、玄関脇にあるドアがゆっくり開いた。咄嗟に目をやる。僕らの部屋の構造を当てはめると、それはバスルームにあたるドア。少しだけ、息を飲む。ベッドから立ち上がる僕。ドアの向こうから現れる人影。小さな人影。

少女だった。予想通りというかなんというか、少女だった。

真っ白なワンピースに身を包んだ少女。

つやつやした長い髪、目が大きくてまつげが長くて言うところのフランス人形みたいで、というか目だけじゃなくて全体的に人形みたいな、生気のなさ漂う、作り物みたいな、少女。

あれ？ この子どこかで見たことあるなー、と思いつつ。

「あ、えつと、はじめまして。お父さんから説明あつ」あ、思い出した。この子、あれだ 『月刊・殺人鬼の友』十二月号の、表紙の。「……君が、日ノ、海ちゃ」どん！ 突然。

耳をつんざく爆発音。体を揺らす破裂音。

音の発生源は 探るまでもなく、今、目の前に見えてる。

静かに佇む少女の周りでもうもうと立つ白煙と、ベッドの上で仁王立つ子流九が構えている巨大なもの、の關係性を考えればとって
も明らか。

「うわクソはずしたありえねええええああああ！」

「……あー、子流九」

「なんだよドブ野郎！」相当興奮してるらしく、ジャングル的ボリ
ュームで叫ぶ子流九。

「それなに？ その、手に持ってるもの」

「ロケットランチャーだよ！」

「……どこから出したの」

「パーカーの懐だよ！ おなじみの！」

唾を吐き散らし叫び散らしながらチャカチャカチャカと子流九が
パーカーの懐を漁り始めたので、あ、これ二発目撃つなと思い、思
ったときには僕はもうベッドにダイブをキメていた。具体的に言う
とベッドの上に仁王立つ子流九の脚に向かってタックルを、アメフ
ト的な感じで。「えわ！」ぐらつき倒れ込む子流九。上に馬乗り押
さえ込む僕。

「なんだよおい九々人！ わけわかんねえタイミングでサカってん
じゃねえぞドブ野郎！」

「サカってないっていうかとりあえずそれ手から離そう子流九」

もつれもつれながらどうにかロケットランチャー（今さら言っけど実物初めて見た）を奪い、ぱいっと床に投げ捨てる。ごいん、と鈍い音。ふうと一息汗を拭う、と、子流九が何やらパーカーの懷に手をつ込んでごそごそしているのが見え、速やかに再度タツクルをキメる僕。

「なんだよ九々人！ だからサカつてんじゃねえよ！ 空気とタイミング読んで発情しろよ！ ムードによつてはあたしだってちゃんと受け入れるっつーんだよ！」

「訊いてないっていうかとりあえずパーカー脱ごう子流九」

「脱がそうとすんじゃねえよ！ やっぱサカつてんじゃなか！」

「いやそうじゃなくっていうか仕事の邪魔しないでって言ったですよ僕」

「保障出来かねるって言っただろうがあたし！」

うわー確かに、と思いながらそれでもなんとか子流九の物騒な黒パーカーを脱がそうと必死でもつれもつれしていると。

ぱんつ。

またしても破裂音。でも今度のは小さい（あくまでロケットランチャーと比べるとの話）。

反射的に少女のほうを見る。少女はどこか眠そうなぼんやりとした目で、ベッドの上でもつれ合う僕らをじっと見ている。少女の無事は確認出来た。よし。ほっとしながらでもよく見ると、少女のそのぼんやりした目が微妙に僕らを捉えていないことに気づく。どこ見てるんだ？ 僕の……………あ、後ろ？

振り返る。

黒い丸が目の前にあった。

あ。

これ銃口だ、と二秒くらいで気づく。

その銃口の向こうには黒いジャージ姿の女の子が立っている。そんな遠近法。……あれ？ この子どこで見たな、と思っているとそのどつかで見た子が銃の引き金に掛けた指にくいつと小さく力を込めたした、ので僕はその銃口を人差し指でふにつと塞ぐ。

「あー、えっと……お嬢さん（名前わかんないから暫定的にこう呼んだ、すごいでさい）。もし夢幻紳士の冒険活劇編読んだことあったら知ってるかもしれないけど、この状態で銃撃したら、君の手、吹き飛ぶよ」

「えーそうなの？ それどういう原理？」背後から興味津々で覗き込んでくる子流九。

「えっとね、僕もよくわかんないんだけど、とにかく銃身が破裂しちゃうらしい、んだけど、どうだろ、怪しいよね」

「うーん確かに怪しいなー」

「怪しいからとりあえず、ここはこうして切り抜けるのが得策だね」

の、「ね」の音に力を込めながらトスツと、銃口を塞いでないほうの手で黒ジャージ少女のおなか（具体的に言うとおへその下三センチの場所）に突きを入れる。そう、急所。その昔、父に習った微かな記憶。ぐ、だか、う、だか、言葉にならない声を小さく漏らして少女はその場にばったん。うーん。暴力はあんまり僕のポリシーじゃないんだけどなあとため息つきつき苦々しく思いながら隣を見ると床に転がるロケットランチャーを今まさに拾い上げようとする子流九。もちろんすぐおなかに突きを入れる。子流九もばったん。うーん。僕結構あれだな。強いんだな。新たな自分を発見出来て不思議な達成感に浸る。ふと、我に返る。……視線を感じる。

少女 日ノ海の、眠そうな、ぼんやりした、生気の感じられない、そして少し訝しげな視線。

辺りを見回す。無造作に転がる二人の女の子と、壁にでかか空いたロケットランチャーの穴。あー終末的。そりゃ訝しげな視線投げかけられるよなー。とりあえずなんか言ってごまかそう、と僕の

口から出た言葉は、

「あ、ははは、あとでまた来まーす」

……わー、ださい。

（後書き）

三話目以降は、7/15時点ではまだこの世にありません。超頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9052u/>

東京カストロホテル九々九九式

2011年7月16日03時12分発行